

体育における児童の運動欲求と仲間との関係についての一考察

著者	野嶋 敏一, 藤田 善正, 俵谷 好一
雑誌名	大阪総合保育大学児童保育論集
号	2
ページ	15-32
発行年	2023-03-30
URL	http://doi.org/10.15043/00001061



〔論文〕

体育における児童の運動欲求と仲間との関係についての一考察

野 嶋 敏 一
Toshikazu Nojima

大阪総合保育大学
児童保育学部

藤 田 善 正
Yoshimasa Fujita

大阪総合保育大学
児童保育学部 非常勤講師

俵 谷 好 一
Koichi Hyotani

大阪総合保育大学
児童保育学部 非常勤講師

本研究の目的は、体育における児童の運動欲求と仲間との関係について考察することである。そのために、運動領域の運動特性に触れる学習指導を工夫したり、やればできるという児童の意識を育み、仲間同士が協力しあったり励ましあったりすることが、もっと運動したい、楽しみたい、できるようになりたいという個人の運動欲求に繋がっていくことを考察する。

コロナ禍の現状では、体育も例外になく、対面でのグループ活動の制限やオンライン授業とのハイブリッドの授業では、運動に慣れ、親しむという活動が十分できないということが、児童の体力低下を加速させている。

そこで、コロナが収束した場合を想定し、個人領域の事例としての器械運動と、集団領域の事例としてのボールゲーム運動を通して、仲間と話し合い、協力しあひながら技能向上すること、すなわち仲間との関係において個人の運動欲求がより高まり、やればできると感じさせることができ、主体的に学ぶ運動意欲につながることを検証する。また、道徳の内容項目「希望と勇気、努力と強い意志」「個性の伸長」「友情、信頼」「公平、公正、社会正義」は運動領域の運動特性との関連性が高いことから、個人の運動欲求と仲間との関係を考える。

さらに、道徳教育の視点から体育やスポーツを扱った教材をみたとき、仲間との関係を考える道徳教材の効果的な指導方法を工夫し、体育授業とも関連付けて指導することの有効性を考える。

キーワード：学習意欲、体育の運動特性、道徳の内容項目、仲間との関係、運動欲求

I 仲間との関係における体育の役割

1. 問題と先行研究

学習指導要領総則第1章改訂の経緯⁹⁾には、21世紀は、いわゆる「知識基盤社会」の時代であることから、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になると述べられている。

歴史的に、明治以降のわが国の教育界に知られているのは、知育・徳育・体育の三育である。これは、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820～1903) の教育論“Education ; Intellectual, Moral, and Physical” (1860)¹⁶⁾ の分類が翻訳されたものであり、知育は頭を使つての教育、徳育は心を育てる教育、体育は身体を通

しての教育のことである。これは、まさに現行学習指導要領の理念である「生きる力」である⁶⁾。

最近の子どもをめぐる問題行動は、キレる、不登校、自殺や自傷行為、いじめ、暴力、学級崩壊など枚挙にいとまはない。現今の教育現場は、教師や子ども・学校も課題が山積している。体罰問題もしかりである。中学校や高等学校の部活動では、勝利主義のもと体罰事案が多く発生してきた。

体育は、知育・徳育と並び三育の柱として欠かせない柱の一つである。体育は、学校における授業の教科の一つであり、小学校から高等学校までのすべての学年で実施されている。中村敏雄 (1989)¹¹⁾ は、体育とスポーツの関係について、「体育にとってスポーツはあくまでも手段であり、媒介であつて、スポーツをすることは、直ちに体育であるということはいえず、スポーツと体育の関係においては、スポーツが体育の範疇において教材の位置を超えるものではない」と述べている。また、杉山克也 (2009)¹⁷⁾ は、「体育授業における道徳的效果に

大阪総合保育大学
〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26
t-nojima@jonan.ac.jp

関する実践的研究」において、著者によって視点に違いがあるが、体育が仲間との関係において大きな働きをすることを述べている。

現行の小学校学習指導要領における体育科の目標⁸⁾は、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」と、これまでの体育科の目標を基本的に踏まえつつ、その考え方を明確にしたものである。

とりわけ、「心と体を一体としてとらえ」とは、児童の心身ともに健全な発達を促すためには、心と体を一体としてとらえた指導が重要であり、心と体の発達の状態を踏まえて、運動による心と体への効果、健康、特に心の健康が運動と密接に関連していることを理解することが大切である¹¹⁾。

つまり心の問題が運動と密接に関連していることを理解することが大切であるとは、どういうことなのか。ここで心の問題をどうとらえるべきか。小学校児童の心の健康としてとらえ、その内容を学習指導要領（体育編）から考えてみたい。

体育科の授業では、道徳教育の内容と関連して、集団でのゲームなど運動することを通して、粘り強くやり遂げる、きまりやルールを守る、集団に参加し協力するといった態度、フェアプレーの精神、対戦相手や仲間の尊重のような理念が養われる。また、健康・安全についての理解は、生活習慣の大切さを知り、自分の生活を直すことにつながる。

例えば、小学校低学年のゲーム領域の「(2) 態度」には、「運動に進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動したり、勝敗を受け入れたり、場の安全に気をつけたりすることができるようにする。」とある。体育の授業ではゲームに積極的に取り組む姿を取り上げ、みんなが協力しあって取り組む姿が美しく、楽しい雰囲気に満ち溢れていることを伝えることが望ましい。しかし、もしもゲームのきまりや順番が守れなかったためにトラブルが起こったならば、その際にきまりを守ることの大切さを指導することが必要になってくる。

また、このような指導とともに体育の授業の中で、道徳の時間で取り上げた道徳教育の内容に関連する道徳的な行為や考え方が見られたときは、道徳の時間と関連付けたり指導したりすることも大切になってくる。すなわち、体育科の指導においては体育科の目標「心と体を一体としてとらえ…」に応じて道徳と関連付けて適切に指導する必要がある。体育科における道徳教育の指導においては、学習活動や学習態度への配慮、教師の態度や行

動による感化が子ども達の心に大きく影響するものと考える。

体育の目的は、スポーツ選手を育成することではなく、生涯運動に親しむ素地を養うことと合わせて、人格の形成にある。教育基本法の目的である人格の完成をめざす一翼をになう教育活動である。すなわち、体育はチームワーク、忍耐力、責任感、規律、フェアプレーといった道徳的価値を身に付けさせることもねらいの一つである。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、体育における個人の運動欲求と仲間との関係について考察することである。

- (1) 筆者の一人が1995年に大阪市立中央小学校で行った、体育の授業実践¹⁴⁾を体育における個人の運動欲求と仲間との関係という視点からコロナ禍の今、再検討することによって体育の役割を考察する。
- (2) 体育学習と道徳的価値（内容項目）とはどのような関連があるのかを明確にし、道徳教育の視点から体育やスポーツをみたとき、どのような道徳教材が存在し、どう指導することが効果的なのかを考察する。

II 仲間との関係の視点からみる体育授業

1. 豊かな人間関係を育む体育授業

授業実践にあたっては、児童の運動欲求の高まりを媒介するのは、児童の仲間との関係と考えた。豊かな人間関係の醸成、すなわち仲間との関係が個人の運動欲求を高めるのではないかと考えた。個人の欲求が高い児童は自ら学ぶ意欲が高いのではないかと考えた。

個人の欲求が高い児童はものごとに挑む心の動き、情意的な行動を仲間と共に動く中で主体性、意志力が育まれ、それらが行動化し、態度化していく姿として現れると考える。しかし、体育の活動に仲間との関係づくりの教育作用が認められたとしても、個人の運動欲求、つまり運動やスポーツに意欲と関心、行動がなければ意味がない。また、共に活動する仲間の行為、存在が重要である。そこで筆者の一人が授業実践¹⁴⁾において重視したことや創意工夫したことを仲間との関係の視点から再検討すると、次のようなことがより明確になってきた。

2. 授業実践で重視したことや創意工夫したこと

(1) 仲間との関係

個人の運動欲求の視点から体育授業における仲間との関係を考えるとき、表1のように、学年ごとの心身の発

表1 体育授業を通して高めたい仲間との関係

学年	その時期にありがちな仲間との関係		体育授業を通して高めたい仲間との関係
低学年	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心性が残っているため、わがままな言動が表出しやすい。 協力することの大切さ・決められた役割を果たすことの大切さ・仲間を応援することの大切さに気づきつつあるが、学級としてのまとまりには弱さがある。 	⇒	<ul style="list-style-type: none"> わがままを言わずに自己の思いを素直に表出し、互いに認め合う。 協力しあって、学習の準備や後片付けをする。 決められた役割を果たし、力いっぱい運動に取り組む。 仲間の動きを精一杯応援する。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 仲間意識が育ち、協力しあうことや決められた役割を果たし、工夫して運動に取り組んだりすることの大切さは理解できるが、いつでも誰に対してもできるとは限らない。 個や集団の課題を意識できないことがある。 	⇒	<ul style="list-style-type: none"> 協力しあって、学習の準備や後片付けをする。 決められた役割を果たし、工夫して運動に取り組む。 役割を分担して、協力しあって運動に取り組む。 個や集団の課題を意識して運動に取り組む。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係において、好き嫌いがはっきりしてくるので、いつでも誰とでも協力ができるとは限らない。 羞恥心が出てくるので、できるできないといった体面を気にするようになる。 集団における個の役割が十分理解できていないことがある。 	⇒	<ul style="list-style-type: none"> 役割を個のよさに応じて分担し、互いの責任を果たす。 決められた役割を果たし、個や集団の課題に応じて学習の場(練習内容、方法、場づくり、学習時間の効率的活用)を工夫する。 個や集団の課題に応じて、互いの関わりを工夫し、協力しあって解決にあたる。

達にその時期にありがちな仲間との関係の課題を押さえておくことが大切である。それが、体育授業を通してより望ましい仲間との関係に高めていくための指導や支援のポイントにつながる。

(2) 学習者自ら行う評価活動

さらに、学習者である児童の運動欲求を高めるために個人の学びを広め・深める自己の課題について、課題の解決に向けてのみちすじについて考え、個人が自らの学習状況を自己診断することが重要である。それが、学習者自ら行う評価活動であり、個人の運動欲求と深く関わっていく。個人の運動欲求の視点から学習者自ら行う評価活動の意義を考えると、自他のよさや成長と同時に課題を見つけることを通して、自己認識や相互理解を深めることにもつながると考えられる。学習者自ら行う評価活動をするために児童に求められることは、表2のとおりである。

表2 自己評価・相互評価活動するために学習者に求められること

<ul style="list-style-type: none"> ① 学習の内容や方法がわかる。 ② 今ある力が把握できる。 ③ 進歩の度合いがわかる。 ④ 次時の課題を決めたり、考えたりできる。 ⑤ 自己の評価、仲間・友だちの評価、教師の助言を素直に受け入れることができる。

体育の活動は、小集団で学習する機会が多く、これらの評価活動が仲間と協力、援助し合う態度の育成が重要である。すなわち、学習者は仲間との関係において、学習意欲も高揚したり、阻害されたりする。体育の楽しさ

や喜びを味わう場面の多くは課題の達成に仲間・友だちの励まし、応援、協力が大きく関与している。

(3) 学習指導計画と学習資料(学習カード)

次に、個人の運動欲求を高め、意欲的な学びをすすめるために、学習者が「何のために」「何をどのように」という学び方を追求する学びのみちすじ(表3)が重要である。この「自己の課題の明確化」「課題の解決の計画化」「課題の追究」「課題の解決・評価」の4つを設定する。したがって、学習では、課題の明確さ、魅力、追求方法の自覚、達成感、効力感の実感がなければならない。そこで、学習の中に一人一人のめあてに合った学習時間である「いきいきタイム」を設定し、その時間を学習者に委ね、仲間と協力協同的な学習できる時間として教師は支援者としての役割を担い、学習者の主体的な学びの活動ができる学びのみちすじを単元構成した。

さらに、学習資料(学習カード)は、運動教材のもつ運動課題を構造化し、技術的な要素を取り上げ、学習を効果的に進め、「学習の仕方」の習得を支援するねらいをもつ。学習資料(学習カード)の作成にあたっては、学習者が学習の過程で課題を明確に認識し、練習の方法や解決の仕方などの提示にあたって、技能のポイントが楽しみながら身につくようにゲーム的要素を含むことも重要である。

個人の運動欲求の視点からこのような学習指導計画と学習資料(学習カード)の意義を考えると、学習や教育には、①指導・支援 ②任せるという二つの要因が不可欠である。とりわけ、任せるとするには、学習者に自己課題を明確化させると同時に、仲間とともに自己評価能力を高めることが重要である。

表3 学び方を追求する学びのみちすじ

(分)	第1次			第2次				第3次		
	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時
5	準備運動			準備・めあての確認				準備・めあての確認		
10	チーム 編成	ミゲーム		ゲーム1 (姉妹チームと)				作戦		
15				話し合い				ゲーム3 (チーム対抗)		
20	試しのゲーム			いきいきタイム				作戦		
25								いきいきタイム		
30	ルールづくり			ゲーム2 (チーム対抗)				いきいきタイム		
35								ゲーム3 (チーム対抗)		
40	まとめ			まとめ				まとめ		
45										

表4 学習資料(学習カード)の例

6年 マット学習カード		
めあて① 技		
めあて② 技		
今日の学習の感想や発見したこと	自分で評価しよう!(◎、○、△)	
	1. めあてをもって練習した	
	2. 協力合って練習した	
	3. きまりや約束を守った	
	4. 新しい発見をした	
	5. 力いっぱい運動した	

表5 学習資料(学習カード)の必要条件

- ① 学習のみちすじにあっていること。
- ② 子ども達が今の力を知り、次に挑戦していく課題を見つけやすいこと。
- ③ 子ども達のつまずきを解決するヒントを含んでいること。
- ④ 記述が簡単で時間がかからないこと。

(4) 教具の開発と創作

体育は、スポーツを手段として運動するが、ただスポーツを子ども達に与えるだけでは、子ども達の心の内面にある運動欲求が湧き出るものではない。また、仲間と仲良くスポーツを楽しみたいという欲求が高まると思えない。

学習者の心の内面に「楽しそうだな」「自分にもできそうだな」「はやくやりたいな」という知的好奇心が湧き出るような教具の開発が求められる。教具とは、自然と動き出すような方向性を持ち、仲間とともに楽しみながら基礎的・基本的な内容(学び方・技能)を含んでいるものを開発することである。

さて、教具を開発するのは授業に非常に重要で、この授業実践の中で創意工夫した教具の活用は、個人の運動欲求の視点からは、次のようなことが期待できる。

- ① 「ボール収納棚付学習移動机」や「書き込み・マグネット式作戦盤」のような教具では、チームの話し合いを促進したり、作戦を立てたりするなど協働的学習を行うことによって、学習者である児童同士をつなぐ

中で、教師が想定していなかった考えや方法が湧き上がってくる。

- ② 「ガードシュートゲーム」など教材への意欲を喚起するタワー型ゴールボックスでは、子どもの主体的学習を促すことができる。
- ③ 「発砲スチロールハードルパー」のような恐怖心を和らげる教具では、子どもが怖がらずに自信をもって積極的に学習に取り組むことができる。

個人の運動欲求と仲間との関係を論ずるとき、すべての子ども達の心の内面に潜む運動・スポーツへの興味・関心、意欲の喚起なくしては、運動欲求も高まらない。運動欲求の喪失は、できない、わからない、成功経験がない、やってもむだでありしんどいだけ、など個々の学習者において違いはあるものの、全ての学習者はできるようになりたい、わかるようになりたい、楽しみたいという強い願いをもっていると考えられる。

体育の学習活動の中には、仲間や友だちとの良好な関係においては実際の体育学習では以下のような学習者の

姿として表出している¹⁴⁾。

- | |
|--|
| <p>① 自分の思いや考えを素直に表現し、明るく活発におもいきって運動する姿。</p> <p>② 自己の学習状況から自己の課題を学習資料（学習カード）からの確につかみ、課題解決にむけて挑戦している姿。</p> <p>③ これまでの経験や体験をもとに、仲間や友だちとともに練習をしたり練習を工夫したりしている姿。</p> <p>④ 仲間や友だちの助言を素直に聞き、自分の役割を自覚し行動する姿。</p> |
|--|

体育学習にかぎらず、学習者は学校生活で学習者相互が触れ合う中で意図や目的がなくても良好な仲間意識を高めていくが、体育学習は、運動・スポーツを手段として学習するのだが、体育活動には多くの道徳的価値が内在し、むしろ体育学習を通して意図的行動的に道徳的規範意識を意図的・計画的に高められる。

(5) 体育と道徳の関連

今回の学習指導要領の改訂は大卒の改革に加えて、教科外活動「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」として制定することであった。そもそも、道徳の教科化のきっかけとなったのは、全国各地で続発するいじめ問題であった。その後、いじめ防止のための法律が成立し、いじめの定義も何度も変わってきているが、それ以後も、いじめが原因で自殺に追い込まれる児童・生徒が後を絶たない。

また、翻って、体育という教科を考える上で押さえておかなければならないことの一つとして、とりわけ、小学校から高等学校にかけては、学級の中でスポーツができる子どもが優位に立ち、できない子どもは自分に自信が持てなくて消極的になる傾向が見られる。他の教科と比べて、体育の授業では、学級全員の前で運動しなければならないために、一挙手一投足が衆目に晒される。また、勝ち負けが伴うスポーツでは、勝つことが優越感に、負けることが劣等感や集団から疎外されることにつながる傾向がある。

このような道徳と体育をめぐる近年の状況に鑑みるならば、例えば、各教科の中でそれぞれの対処法を考案することも、もちろん大切なことであろう。例えば、道徳の中でいじめの問題を多面的・多角的に考え、議論することも重要である。また、体育における問題を克服するためには、できないことをできるようにする指導の工夫改善と同時に、多様なスポーツに接することで、自分にとって得意な種目を見つける機会を与えることが求めら

れる。

しかし、この道徳と体育は、心と身体という二元論で分けられ得るが、そもそもまったく違う事柄を扱う教科ではないはずであり、お互いの教科をお互いに含みあうものである。例えば、チームスポーツを通しては、次のような学びが得られるであろう。誰もが皆得意不得意があることから、自分のよさを知り、人のよさを見るという感性が生まれ、様々なポジションや役割を経験するとそれぞれの立場の理解もより促進される。

さらに、成功を共に喜び、チームメイトの失敗をかばうような心の育成や集団形成が求められる。また道徳では、学習指導要領では、「考え、議論する」ことの必要性が強調されている。しかしながら、小学校の道徳において内容項目や理念についての抽象的な議論がなじみはずはない。そうではなく、具体的な学習や生活の場面に即した事例が必要であるが、体育という教科はそのような身体を伴った具体性を文字どおり付与するものとなる。いじめといったネガティブな指向を共有するような集団性ではなく、実際の競技や運動によってポジティブな集団性を体感することは、児童の個々の運動欲求の高まりを得る大きな手助けとなるであろう。

また、実際の道徳の授業においては、教材が使われるが、その中には、体育やスポーツを描いたものがある。筆者の一人が、入手した道徳の教材を学習指導要領における道徳の内容項目別に一覧表（表9）にしたが、そこには子どもに親しみやすい題材としてスポーツ選手が取り上げられることが多いことが見て取れる。

おそらく、実際の学校現場では、体育と道徳との関連づけた指導は多く見られ、今後様々な工夫がなされていくことであろう。そして、本稿はその嚆矢となりたいと考えているのである。身体と心をつなげ、人間の全体性を回復するという意味において、体育と道徳の関連づけた様々な実践が考えられるべきである。ただし、小学校教育の事例として、今日までその二つの教科だけをつなげる事例はあまり多く紹介されていない。そこで、本稿がそのつなげる役割を果たすものと考えている。

また、本稿の執筆者たちは、以下のⅢの体育の学習の事例において、体育の指導における仲間とのつながりを考察していくこととする。集団運動であるゲーム領域の中学年のボールゲームや高学年の個人運動の器械運動系のマット運動と仲間との関係を関連付けることによって、児童の技能と他者への意識の変容が期待できると考えた。具体的な事例をⅢでは提案していくが、個人の欲求と仲間との関係については、Ⅵのまとめと今後の展望で検討していくことになる。

Ⅲ 実践事例を通して

1. スポーツの種目と個人の運動欲求

体育授業では、各学年で年間を通していろいろな単元や種目を行うが、大別すると個人スポーツと集団スポーツに分けられる。個人の欲求の面から個人スポーツを考えると、そこで育まれるものは、自分自身を理解する能力や自分自身に厳しくできることであるが、同時に、できる・できない、速い・遅いなどが自分にも他の人にもはっきりわかるため、できない・遅い学習者は苦手意識が強くなり忌避傾向が生まれやすい。一方、集団スポーツで育まれるものは、みんなが協力して行うことによる協調性であるが、集団スポーツには勝ち負けが伴うため、苦手な子どもや失敗した子どもが集団から疎外される傾向がある。

そこで、個人スポーツの事例として、学年が進むにつれて苦手意識をもつ者が多くなるマット運動と、集団スポーツの事例として、得点がしやすく、集団意識を高める上で効果的なゲーム「ガードシュートゲーム」を採り上げて、それぞれの種目がよりよくできるように指導を工夫改善することによって個人欲求と仲間との関係を探る。

2. 個人スポーツの例（5年マット運動）

(1) マット運動に対する苦手意識の克服

高学年の学習者は、マット運動はあまり好きでないと感じている児童が多く、苦手意識も強い。高村文武(1999)が山梨県の児童・生徒総数8,158名を対象に調査した研究¹⁸⁾や、大谷一記 落合優(2006)が神奈川

県の第4～6学年児童 3,735名を対象にした研究¹³⁾においてもそのような顕著な傾向が見られる。筆者の一人(1995)が、児童にアンケートを取る際については、事前に研究資料として活用するところを十分に説明して実施した。同様に保護者にも事前にプリントを配布して説明し理解を求めた。そのうえで、第5学年児童男女126名にマット運動に関する苦手意識を調査すると、

- 仲間・友だちにいやなことを言われたとき (79.7%)
- 仲間・友だちと仲良く学習できなかったとき (54.2%)
- 練習をしても上手になれなかったとき (55.1%)
- 失敗をして、怖いおもいやけがをしたとき (55.1%)
- 練習方法がわからないとき (29.7%)

など仲間からいやなことを言われたときであり、特に女子は失敗しても笑わないでほしい気持ちが強い。

逆にマット運動が好きな児童の意識をもつ児童に調査すると、

- 新しい技やできない技に挑戦してできたとき (95.8%)
- 目標のステップをのりこえられたとき (91.5%)
- うまくなる方法がわかったとき (83.1%)
- 仲間・友だちからほめられたとき (83.9%)
- 仲間・友だちに助言してもらったとき (72.0%)

など、新しい技に挑戦したい、できる技をもっと上手になりたい、できる方法をアドバイスしてほしいという気持ちが強く窺える。

このような実情から、意欲的にマット運動を学ぶために育てたい児童の態度育成を次のように考えた。

- ① 自ら学習する課題を見つけ、課題解決にまじめに取り組む態度。
- ② 学習資料(学習カード)を活用して、自ら仲間・


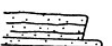


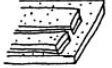

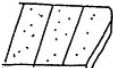
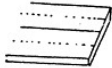
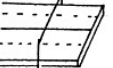
板マット(回転のスピードを増す。)	段マット(伸膝技ができやすくする。)	ロールマット(開脚技をできやすくする。)
		
セフティマット(倒れた時の痛みや恐怖心をやわらげる。)	溝マット(回転するときに頭がじゃまにならないようにする。)	よこじまマット ロールマット付(跳び上がって着手する感じをつかむ。)
		
よこじまマット(踏切位置や手のつく位置などのめあてを持つ。)	たてじまマット(真っ直ぐ回転するための手や足の位置を知る。)	たてじまマットゴム付(側転の足の上がりや跳び込みの高さのめあてを持つ。)
		

図1 学習の場の工夫—ねらいにあった具体的な学習の場—

友だちと共に学ぶ態度。

- ③ 考えや思いを素直に表現し、明るく積極的に行動する態度。

(2) マット運動の楽しさにふれる児童の姿

マット運動のような達成的・克服的な要素が含まれる運動では、技を習得するため自ら課題を見つけ、その解決に向けて追究していくのは一人では達成できにくい。仲間と教えあい認め合って、共に高まっていく児童の姿の表出、すなわち、準備運動のための場作りから、準備ができしだい、他へ応援にまわったり、協力して場に変化を加えたり、課題解決にむけて助け合ったりすることなど、自らすすんで行動する児童の姿こそが大切である。

マット運動の楽しさは、自分で見つけた課題を仲間と協力しながら工夫し開発した学習の場(図1)で、自分のペースで少しずつ克服・達成していくことにあると考える。この学習の仕方ですべての児童の学習をすすめた結果、学習者は、マット運動の楽しさにふれる感想を毎学習後の話し合いで発表している。

(3) 個人差に応じた学び方の工夫

マット運動などの器械運動は、児童の技の習得状況の個人差が大きく、同じ場作りで学習するのは困難である。したがって、児童の学習状況に応じた場作りが重要である。また、技の習得にかかる時間にも個人差があり、一律に時間を限った練習では上達は見込めない。

そこで、個人差に応じた技への挑戦時間を確保できる学びのみちすじが必要である⁷⁾。

表6 5年マット運動の学習指導計画

	始め	なか					終わり	学 裁	
	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時		
10 20 30 40	オリエンテーション ・暑がりの旅 ・字カードの活 用した ・でき読書 ・いろいろな遊 具 ・おての禮	準備運動・場づくり							輪 種・号(り) 技の発表会 ・得意技 ・工夫した技 ・頑張った技 ま と め
		めあて1		技の 確 か め	めあて1			できる技の練習 めあて2 新しい技の練習	
		できる技の練習							
		めあて2		新しい技の練習					

個人差がある学習者がマット運動を楽しむためには、①できる技を楽しむ時間、②できそうな技に挑戦する時間を学習の中に個人差に応じて時間を設定する。マット運動を苦手に思っている児童もできる技を繰り返し練習することにより、新しい技への挑戦心も芽生えてくる。自己の課題を見つけたり、仲間と話し合ったりするには、学習資料が重要な役割を果たす。

学習資料として、技の分析図、技術的なポイントを記し、できるための動きをイメージできる図解をもとにスモールステップで練習を積み上げることができものを



図2 学習資料(技の分析図・技術的ポイント)

児童に提示する(図2)。また、各技の系統を知り、自己の課題把握に役立つように、自己評価できるように工夫する。つまり、自己のつまずきは何か、どこを修正するのか。そのためにどのような練習をすればよいのかなどを一人で考えたり、仲間と話し合っただけで考えることができる学習資料でなければならない。このような学習資料(技の分析図・技術的ポイント)を与えることが(図3)、自己学習へとつながる⁷⁾。

そのような指導と学習者の励まし合いが相まって、指導前と指導後のマット運動に対する好き嫌いを第5学年児童男女126名にマット運動に関する苦手意識を調査すると、図3のように、「とても好き」と答える学習者の比率が増加し、「嫌いなほうだ」「嫌い」と答える比率が減少した。

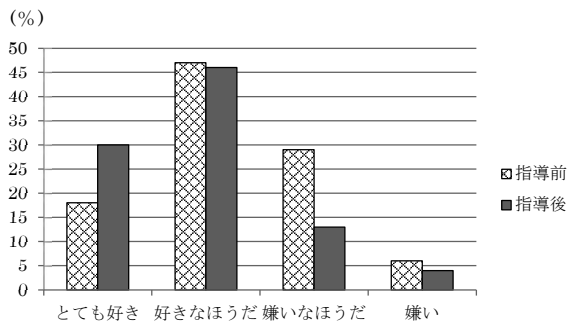


図3 マット運動の好き嫌い

このようなことから、マット運動のような「器械運動系」領域の個人スポーツは、できなかったことができるようになることを通して、苦手意識を仲間とともに克服することができると共に新しい技に挑もうとする積極性が育まれるという点で、運動欲求に資すると考えられる。

3. 集団スポーツの例(4年 ゲーム「ガードシュートゲーム」¹⁴⁾)

(1) ボールゲーム教材の視点

学習者がゲームを楽しく感じるためには得点シーンが多くあることである。シュートが難しすぎて得点にならなければ運動欲求は高まらない。といって安易に誰でもたやすくゴールできるようではまたこれも運動欲求が高まらない。

ガードシュートゲームは、手を使ってボールを操作し、2つのチームが1つのボールを媒介として、一定のルールを守り、味方と協力しあって相手の妨害をかわしながら、相手よりも多くの得点を得ることを競争して楽しむ運動である。

ボール運動は、大谷と落合(2006)の研究¹³⁾において、どの学年においても多くの学習者に好まれている運動であるが、少数ながら苦手な学習者がいることを忘れてはならない。

第4学年のボールゲームについての筆者の一人(1995)のゲーム学習についての意識調査(調査人数96人)は、マット運動と同様の倫理的配慮のもとに行ったが、それによると、子ども達が楽しいと感じる時は、表7のように男女ともシュートした時、ゲームに勝った時という答えが多い。反対に楽しくないという答えにゲームに負けたからは当然だが、悪口や文句を言われたり、反則されたりした時が楽しくないという答えが多い。このことから、子ども達の多くは勝ち負けも大事だが、みんながルールを守り、気持ちよくゲームをすることが大切であると感じている。また、ゲームを楽しくするためには、表8のようなことに気を付けることが大切であると答えている。

表7 ガードシュートゲームについて(3年生での経験をもとに自由記述)

単位 (%)

楽しいと思った時	男	女	つまらないと思った時	男	女
シュートした	59	57	ゲームに負けた	29	23
ゲームに勝った	27	31	悪口、文句、反則された	29	48
パスがとおった	6	0	パスがこない	10	15
作戦がうまくいった	2	2	得点できない	8	6
チームに役立った	2	0	けんかした	0	6
ほめられた	0	2	一度もない	8	4

表8 ガードシュートゲームを楽しくするために気を付けること

単位 (%)

	男	女
ルールやマナーを守る	44	49
仲良くけんかをしない	29	32
パスをつなぐ	4	6
協力する	4	6

(その他)

- ・一人一人がんばる
- ・話し合う
- ・一人一人が気を付ける
- ・作戦を工夫する
- ・めあてを決める

(2) ボールゲームづくりの視点¹⁰⁾

① 場の工夫

技能の差があっても、シュートチャンスを生かせるようにゴールを大きくし、誰もがシュートできる喜びを味わうことができる。

ボールにふれる機会を多くするためにプレーヤーの人数を少なくする。

② ルールの工夫

簡単なルールからゲームを始め、揉め事などの解決やもっとゲームを楽しめるためにルールを追加・修正していく。

③ ミニゲームの開発

ボールゲームに必要な動きの要素（パス・シュート・コンビネーションプレー）を児童一人一人が楽しみながら身につける手立てとしてミニゲーム（図4）を開発する。ミニゲームは、ゲームの中から動きの問題点を解決する手立てとして練習や作戦にも用い、児童の意欲的な学びにつなげる。

ボールゲームは、チームでの達成感、仲間との協同協業に楽しさがある。また、学習活動を学習者が考え、工

夫することにも楽しさがある。助け合い、教えあい、話し合う時間を学習者自身が設定できる学習活動が、学習者の運動欲求を高めている。また、仲間の失敗に対する寛容の心を育むことにもつながっている。

授業後にとった学習者の授業に対する感想文を読むと、技術的向上の喜びと共に、学習に積極的に取り組もうとする欲求が育まれたことや、チームの仲間から認められたことの嬉しさから、チームに貢献しようとする意識が高まったことを述べた代表的な感想を以下に紹介する。

A児の授業後の感想

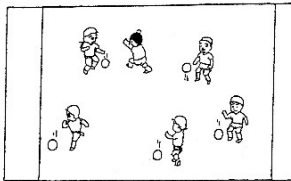
「私がこの学習で一番心に残ったのは、チームの仲間がほめてくれたことです。少しだけパスがうまくなって、チームの勝利に貢献できたと思います。チームのなかでもS君やG君がいっぱいパスをまわしてくれてシュートできたことはとてもうれしかったです。」

ミニゲーム（めあてを解決するための学習資料の活用例）

※ ボールになれるミニゲーム

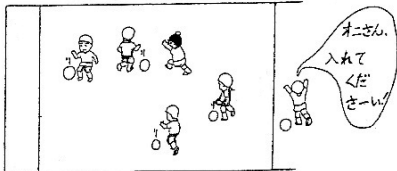
ア. ボールとりおにごっこ

- ・おには、ドリブルしている人のボールをとる。
- ・とられた人がおになる。



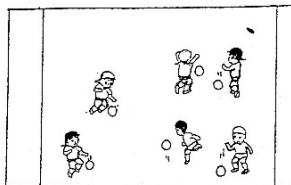
イ. はたきだしおにごっこ

- ・おには、ドリブルしている人のボールをはたきだす・（1回1点）
- ・はたきだされた人は、「おにさん、入れてくださいーい！」とさげんで、入る。



ウ. ドリブルおにごっこ

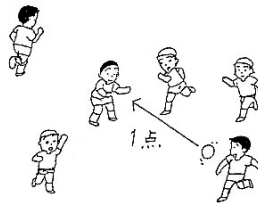
- ・コート内でドリブルしながら、相手チームの人の背中にタッチする。
- ・タッチ1回1点。みんなの合計点で勝ち負けを決める。



※ パスがうまくなるミニゲーム

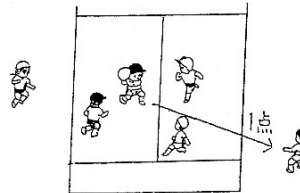
エ. パスマわし

- ・パスが1本通れば1点
- ・パスをカットしたら、カットした方がそのままめめる。（2対2・3対3 など）



オ. ゾーンとおし

- ・一つおいた味方のコートにパスが通ると1点。
- ・パスをカットしたら、カットした方がそのままめめる。



カ. パスうしろゲーム

- ・相手にパスしたら、じぶんのチームのうしろにならぶ。
- ・おとさないで、何回できるかな。

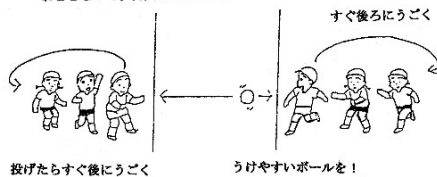


図4 ミニゲームの一例

B 児の授業後の感想

「ぼくは、休み時間や放課後は、一人で遊ぶことが多く、あまり仲間と遊びませんでした。でも、ガードシュートゲームの時は、ボールに慣れる練習やシュートの練習などみんなとすることができました。ゲームであまり活躍できなかったけど最後までがんばることができました。小さな声でしか話せなかったのに、いつのまにか大きな声を出すようになっていました。仲間もたくさんできて、この学習はすごく楽しかったです。」

このようなことから、ボールゲームのような、「ゲーム及びボール運動」領域の集団スポーツは、集団における個の課題や集団での役割を意識した行動を促すという意味で、学習者の運動欲求に資すると考えられる。

IV 道徳教育と体育科の関連（道徳教育全体計画別業をもとに）

1. 道徳教育全体計画別業が教師にもたらす指導意識の向上

道徳教育は、人格形成と直接的にかかわる教育である。文部科学省では、学習指導要領の一部改正と共に、都道府県教育委員会や市町村教育委員会を通して、全小・中学校に「道徳教育全体計画別業」の作成を求めている。別業とは、学校の教育活動全体を通して道徳教育

を進めていく上で必要となる計画であり、学校教育活動全体を通して行われる道徳教育と、「道徳の時間」（道徳科）との関連づけをすることで、より効果的な学びが行われることを期して作成が求められている。

別業については、体育や特別活動のモデル案を作っていた川越市立仙波小学校⁴⁾のようなところもある。特に、体育のような教科書のない教科や特別活動、総合的な学習の時間など、学校が独自で行っている教育活動は、学校ごとの道徳教育全体計画別業を作成する必要がある。道徳教育全体計画別業を作成することが教師にもたらすものは、その教科や単元を指導するにあたって、この教材を通してどのような子どもの成長を期待するかという意識の向上であろう。教師が教科や教材の道徳的価値を意識化することによって、教師の視座が高まり、授業における指導の深みにつながることが期待できる。一方、たとえ作っても、授業や教育活動の計画段階で教職員が確認することをしなければ、「絵に描いた餅」になる。

2. 「内容項目」と体育授業との関連

体育科のように保健領域を除いて教科書がない教科は、各学校がその学校の教育課程に従って道徳教育全体計画別業を作成することが求められている。「特別の教科 道徳」の内容項目をわかりやすく表したキーワードと体育科との関連を表わした道徳教育全体計画別業を学年のつながりをまとめ、表9に示している。

表9 「特別の教科 道徳」と体育科の関連（道徳教育全体計画別業）
（1. 2）（3. 4）（5. 6）は小学校の学年

道徳	内容項目（キーワード）	学年ごとの関連する体育科の単元とその内容や理由など
A	善悪の判断、自律、自由と責任	ソフトバレーボール（5. 6） ゲームや練習での自分の役割を意識して運動する。
	正直、誠実	表現遊び・リズム遊び（1. 2） 明朗身近な動物や乗り物になりきって伸び伸びと表現する。軽快な音楽に乗って楽しく踊る。 毎日の生活と健康（3. 4） 健康の大切さを理解し、明るく健康によい生活を送ろうとする。 心と体のつながり（5. 6） 自分の状態を理解して明るく伸び伸びと生活する。
	節度、節制	体ほぐしの運動（1. 2）（3. 4）（5. 6） 心と体の関係を考え体の調子を整える。 けがの防止（5. 6） 生活を振り返り安全に留意できるようにする。
	個性の伸長	（自分が得意な種目を見つける。）（1. 2） 多様な動きをつくる運動（3. 4） 体の基本的な動きをたくさん身に付けようとする。 （自分が得意な種目を見つけ、それを伸ばす。） 体づくり運動（5. 6） 自己の体の状態や体力に応じて運動の行い方を工夫し、体力をさらに高めようと運動に取り組む。 （自分が得意な種目を見つけ、それを伸ばす。）

道徳 内容項目（キーワード）		学年ごとの関連する体育科の単元とその内容や理由など
A	希望と勇気、努力と強い意志	かけっこ・リレー・高跳び遊び・ゴム跳び遊び・多様な動きをつくる運動・固定施設を使った運動遊び・マット遊び・跳び箱遊び・鉄棒遊び（1.2） 簡単な遊び方を工夫して行う。体の基本的な動きをたくさん身に付けようとする。 ボールゲーム（ボール投げ・ボール蹴り）（1.2） 友だちのゲームを見て、ルールに合わせて判定する。 短距離走・リレー・小型ハードル走・高跳び・幅跳び・マット運動・鉄棒運動・跳び箱運動（3.4） 自分に合った目標を持ち、活動や競走の仕方を工夫する。 ベースボール型ゲーム（3.4） 審判として試合をよく見て、正しい判定を行う。 短距離走・ハードル走・走り高跳び・走り幅跳び・持久走・水泳（5.6） 自分に合った目標を持ち、工夫をしながら根気強く練習する。
	真理の探究	病気の予防（5.6） 自分の生活を振り返り、望ましい生活習慣を身に付けることなどで病気が予防できることを理解する。
B	親切、思いやり	マット遊び・跳び箱遊び・鉄棒遊び（1.2） 友だちに積極的に励まし声かけを送る。 マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動（3.4） 友だちの運動の様子をよく見て、アドバイスを送る。 マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動（5.6） 友だちと励まし合ったり教え合ったりしながら練習する。
	感謝	
	礼儀	ボール投げゲーム（1.2） 礼儀ままりを守り、礼儀を意識してゲームにのぞむ。 サッカー型ゲーム・バスケットボール型ゲーム（3.4） ルールを守り、礼儀正しくゲームにのぞむ。 サッカー・バスケットボール・フラッグフットボール（5.6） ルールを守り、礼儀正しくゲームにのぞむ。
	友情、信頼	体ほぐし運動・鬼遊び・走・跳の運動遊び・ボールゲーム・リズム遊び・表現遊び（1.2） 友だちと助け合って仲良く運動に取り組む。 体ほぐしの運動・走・跳の運動（かけっこ・リレー・小型ハードル走）表現運動（リズムダンス） 用具を操作する運動（一輪車）・ゴール型ゲーム（タグラグビー・ラインサッカーなど）・ベースボール型ゲーム（3.4） 友だちと声をかけ合って、仲良く運動に取り組む。 育ちゆく体とわたし（3.4） 体の発育・発達について理解し、自分と他の人との違いに気付き、認め合うようにする。 体づくり運動（体ほぐし運動）・表現運動（リズム運動・表現） サッカー・バスケットボール・フラッグフットボール（5.6） 仲間を信じ、仲間と声をかけ合い、パスをつないでゲームを行う。（男女協力して運動を行う。）
相互理解、寛容	（友だちの失敗を許して、チームワークを高める。）（3.4） 表現運動（5.6） 互いの良さを認め合って練習や発表をする。 （友だちの失敗を許して、チームワークを高める。）	
C	規則の尊重	鬼遊び・ボールゲーム（ボール投げ・ボール蹴り）（1.2） きまりを守り、仲良く運動する。 ゴール型ゲーム・ベースボール型ゲーム（3.4） ルールを守って仲良く運動する。 サッカー・バスケットボール・フラッグフットボール（5.6） ルールを守って助け合って運動する。
	公正、公平、社会正義	ゲーム型運動（1.2） 勝敗に対して正しい態度がとれるようにする。 ゲーム型運動（3.4） 勝敗に対して正しい態度がとれるようにする。 ゲーム型運動（5.6） 勝敗に対して正しい態度がとれるようにする。
	勤労、公共の精神	
	家族愛、家庭生活の充実	
	よりよい学校生活、集団生活の充実	

体育における児童の運動欲求と仲間との関係についての一考察

道徳 内容項目 (キーワード)	学年ごとの関連する体育科の単元とその内容や理由など	
C	伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度	表現運動 (3.4) (5.6) 伝承されてきた日本の民踊について、郷土の文化を理解し、音楽に合わせて皆で楽しく踊る。
	国際理解、国際親善	表現運動 (3.4) (5.6) 外国の踊りに関して、外国の文化を理解し、音楽に合わせて皆で楽しく踊る。
D	生命の尊さ	水遊び (1.2) 命の大切さと向かい合いながら、水遊びの心得を守って遊ぶ。 泳ぐ・浮く (3.4) 命の大切さと向かい合いながら、浮く・泳ぐ運動の心得を守って泳ぐ。 水泳 (5.6) 命の大切さと向かい合いながら、水泳の心得を守って泳ぐ。
	自然愛護	表現運動 (3.4) ジャングル探検など自然を題材にして、自然を想像しながら即興的に踊る。
	感動、畏敬の念	リズム遊び・表現遊び (1.2) 美しい動きをつくる。 表現運動 (3.4) (5.6) 表現やリズムダンスで美しい動きをつくる。

これらから、体育科の学習は、「特別の教科道徳」のすべての内容項目を網羅しているわけではないものの、多くの内容項目と関連していることがわかる。また、自分が得意な種目を見つけることや、仲間の失敗を許して、チームワークを高めることのように、いくつかのあるいは多くの単元の学習を通して少しずつ子どもが身につけていくこともある。教師がそれを意識して指導に当たることは、学習者の豊かな仲間関係をもたらす体育授業を行うことにもつながる。それは、その種目の説明をするときはもとより、授業中の指示や個々の学習者への言葉かけにも変容をもたらすことが期待される。

V 体育やスポーツを描いた道徳教材の扱い

1. 道徳教材に描かれた体育やスポーツ

道徳科の授業においては、教材が使われるが、その中には、体育やスポーツを描いたものがかなりある。また、特別活動における体育的行事の種目や運動遊びを描いた教材もある。小学校においては、平成30(2018)年度より全児童に教科書が配布されているが、令和2(2020)年度より使われている8社の教科書に掲載されている主として体育やスポーツが描かれている教材を内容項目別に一覧表にすると、表10のようである。

表10 小学校道徳教科書に掲載された体育やスポーツが描かれている教材一覧

	道徳の内容項目を表すキーワード	道徳教材名 ()は実話・伝記資料で、題名に当該の人物名がないもの ○の数字は、その教材を採り上げた教科書会社数		
		小学校1・2年	小学校3・4年	小学校5・6年
A	善悪の判断、自律、自由と責任	・あなたならどうする？	・ドッジボール ・クラスたいこう全員リレー ・サッカーボール	・スイッチ
	正直、誠実	・なわとびカード	・長なわ大会の新記録 ・ほくはMVP	・兵後さんのパラリンピック (兵後正剛)
	節度、節制	X	X	・だれにでもある、こんな心 (長谷部誠) ・なれなかったリレーの選手 ・ひみつのトレーニング
	個性の伸長	・すきなものを見つけよう (澤穂希) ・美宇は、みう(平野美宇)	・ほくらしさってなんだろう (白井健三) ・自分をしんじる心(白井健三) ・つくればいいでしょ ・ハートで勝負(田臥勇太) ・わたしらしさをのばすために (吉田沙保里) ・世界一うつくしい体そうをめざして(内村航平) ・ゆめは世界一のプロ野球マスコット(鳥野修) ・めざせ、百八十回!	・グラウンドにひびく声 ・心は変わる(松岡修造・錦織圭) ・変えたもの・変えなかったもの (内川聖一)

道徳の内容 項目を表す キーワード	道徳教材名 () は実話・伝記資料で、題名に当該の人物名がないもの ○の数字は、その教材を採り上げた教科書会社数		
	小学校1・2年	小学校3・4年	小学校5・6年
A 希望と勇 気、努力と 強い意志	<ul style="list-style-type: none"> ・うかんだうかんだ ・さかあがりできたよ ・だいじょうぶ、キミならできる！ (松岡修造) ・みらいにむかって(錦織圭) ・ソフトボールで金メダルを (上野由岐子) ・なわとび ・自分できめたことだから (福原愛) ・やればできるんだ ・こうさとびができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・いいち、にいっ、いいち、にいっ ・ぼくのへんしん ・花丸手帳(池江璃花子) ・一りん車にのれた ・がんばれ友ちゃん ・がむしゃらに(魁皇) ・なわとび名人 ・ゆめに向かって、ジャンプ！ (佐藤真海) ・ゆめに向かって泳(寺川綾) ・人生を変えるのは自分 (秦由加子) ・すきなことだから 高橋尚子物語 ・きっとできる(高橋尚子) ・レスリングの女王吉田沙保里 ・ゆめはみるものではなく、かな えるもの(澤穂希) ・夢に向かって(内村航平、本田 圭佑、谷真海) ・より遠くへ(谷真海) ・夢に向かって(三浦雄一郎) 	<ul style="list-style-type: none"> ・いつも全力で(イチロー) ・長嶋茂雄の人生は七転び八起き ・今しかできないことをがんばっ て！(吉田沙保里) ・世界に羽ばたく「航平ノート」 (内村航平) ・栄光の架橋 ・イチロー選手のグローブ ・夢を実現するには(大谷翔平) ・世界最強の車いすテニスプレー ヤー(国枝慎吾) ・自分を信じて(鈴木明子) ・氷上の挑戦(浅田真央)
真理の探究			X
B 親切、思い やり	<ul style="list-style-type: none"> ・公園のおにごっこ 	X	X
感謝	X	X	<ul style="list-style-type: none"> ・ソフトボールに恩返しを (上野由岐子) ・悲願の金メダル(上野由岐子) ・こだわりのイナバウアー (羽生結弦)
礼儀	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツとおじぎ 	X	<ul style="list-style-type: none"> ・人間をつくる道-剣道-②
友情、信頼	<ul style="list-style-type: none"> ・竹馬と一りん車 	<ul style="list-style-type: none"> ・ナホとメグーいつもいっしょだ ね ・同じなかまだから ・なみだとえがおの「なでしこジャ パン」 ・十六番目の代表選手(内藤恵美) ・陽子、ドンマイ！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・心のレシーブ ・ひとみと厚 ・ドッジボール対決 ・ドッジボールを百倍楽しくする 方法
相互理解、 寛容		<ul style="list-style-type: none"> ・ドンマイ！ドンマイ！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほくだって ・高とびの選手はだれがなる
C 規則の尊重	<ul style="list-style-type: none"> ・わりこみ ・たのしいドッジボール？ 	X	<ul style="list-style-type: none"> ・星野君の二るい打② ・イエローカード ・ぼくは、伴走者 ・セルフジャッジ
公正、公平、 社会正義	<ul style="list-style-type: none"> ・ドッジボール 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドッジボール大会 ・同じなかまだから② ・ぼくのボールだ ・車いすをあやつって ・しんぱんは自分たちで ・パラリンピックにねがいこめ て(大日方邦子) ・道夫とぼく 	X
勤労、公共 の精神	X	X	X
家族愛、家庭 生活の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくのサッカーシューズ 	X	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめてのアンカー②

体育における児童の運動欲求と仲間との関係についての一考察

	道徳の内容項目を表すキーワード	道徳教材名 () は実話・伝記資料で、題名に当該の人物名がないもの ○の数字は、その教材を採り上げた教科書会社数		
		小学校1・2年	小学校3・4年	小学校5・6年
C	よりよい学校生活、集団生活の充実	・大なわ大会	・学級しょうかい ・時計係 ・四人五きやく ・さか上がり	・二十五人でつないだ金メダル ・星野君の二るい打
	伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度	X	・ふるさとにとどけ、希望の舞 (羽生結弦)	・祖国にオリンピックを(和田勇) ・ふるさとのほこり 広島カーブ
	国際理解、国際親善	・オリンピック・パラリンピック ・オリンピック・パラリンピックのはた	X	・ペルーは泣いている (加藤明) ③ ・東京オリンピック 国旗に込められた思い
D	生命の尊さ	X	・人間愛の金メダル(キエル兄弟)	X
	自然愛護	X	X	X
	感動、畏敬の念	X	X	X
	よりよく生きる喜び			・義足の聖火ランナー (クリス・ムーン) ・スポーツの力(谷真海) ・一人はみんなのために… (元木由紀雄)

※/ (斜線) は、学習指導要領の当該学年にその内容項目がないこと、X は、その内容項目に該当する教材がないことを表す。

小寺正一⁵⁾ は、数多くの副読本に採り上げられた1,196の読み物資料の傾向・特質を分析的に整理し、利用する場合の留意点について考察している。表10に挙げられた体育・スポーツを扱った道徳教材は、東京オリンピック・パラリンピックを直前にした時期の教科書ということもあり、現在活躍中のアスリートを描いた教材が多い。また、「同じなかまだから」(「公平、公正、社会正義」と「友情、信頼」)や「星野君の二るい打」(「規則の尊重」と、「よりよい学校生活、集団生活の充実」)のように、同一教材の中に、複数の価値が含まれるため、教科書会社によって異なる内容項目の教材として挙げられているような場合があるが、それらは同一教材とみなす。さらに「ペルーは泣いている」のように複数の会社に採り上げられている教材は、原文が同じであるため同一教材とみなす。なお、上野由岐子を描いた教材は3編あるが、それぞれ採り上げた部分が異なるため、別教材とみなす。そのようにして数えると、8社の教科書に掲載されている教材は、計112編あるが、その傾向・特質を内容項目(キーワード)の側面から分析する。

学習指導要領の改訂によって、道徳の内容項目は、「よりよく生きる喜び」のように新たに加えられたものや「個性の伸長」や「公平、公正、社会正義」のように、全学年で取り扱うようになったものもあって整理・統合されている。そのような関係で、同じ教材が、従来

とは異なる内容項目の教材として掲載されている場合もある。

表10に掲載された教材を内容項目の側面から分析すると、「希望と勇気、努力と強い意志」を描いた教材が36編と最も多く、続いて「個性の伸長」が13編、「友情、信頼」を描いた教材が10編、「公正、公平、社会正義」を描いた教材が8編と続く。特に、個人種目では、できないことができるようになったり、よりよくできるようになったりするためには「希望と勇気、努力と強い意志」が求められ、また、自分のよさに気付いてそれを伸ばすこと「個性の伸長」が大切であると言える。また、集団種目では、チームワークを高めることが豊かな仲間関係を築き、ひいては勝利につながることから、「友情、信頼」や、「公正、公平」が求められることとも関係する。また、小学校3・4年生で「友情、信頼」「公正、公平、社会正義」を主題とする教材が急増するのは、この時期に児童の仲間意識が発達すると共に、スポーツの苦手な子どもが、集団において仲間外れになる傾向が見られることとも関係が深い。

2. 道徳授業での教材の有効活用

トップアスリートと呼ばれるようなスポーツ選手の人物の伝記的な教材においては、憧れとともに、その努力と工夫を知ること、そこから何かを自分に採り入れるような授業が効果的である。スポーツ選手を描いた伝記

教材の取り扱いの留意点については、藤田¹⁾が述べているが、本論文は、児童の運動欲求と仲間との関係を主題としているので、道徳科の授業の事例としては、小学生児童の学習場面や生活場面を描いた教材を採り上げる。そのような教材では、自分たちと同じ学年・年齢の子どもの人間関係や学級集団の姿が描かれているので、自分たちとの接点を見つけて、深く考えさせるような教材の活用が求められる。

そこで、個人スポーツ（鉄棒）において、希望と勇氣、努力と強い意志を描いた教材として、「ほくのへんしん」（出典 東京書籍）と集団スポーツ（台風の目）において「公正、公平、社会正義」あるいは「友情・信頼」の教材として「同じなかまだから」（出典 日本文教出版）を採り上げて、その効果的な活用について検討する。

- (1) 「希望と勇氣、努力と強い意志」を描いた教材の扱い
教材名：「ほくのへんしん」（出典 東京書籍 4年）¹⁵⁾

運動が苦手なほく（雄志）は、それをごまかして、自分の姿を見つめることを避けていた。しかし、お母さんの言葉がきっかけとなって奮起し、テレビ体操を毎日続けることで前曲げと後ろ反りという第1の目標を達成した。さらに、ほくは、第2の目標を立てて、鉄棒の足かけ後転ができるように毎日の練習に励むようになった。先生から励まされ、友だちから応援を受けて成功し、「雄志さんは、へんしんしたのです。」との称賛を受けた。

できないことができるようになるためには、自分がやろうと決めた目標に向かって、粘り強くあきらめないで取り組み、努力し続ける力が求められる。また、希望と見通しを持ってよりよい自分を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されていく。しかし、失敗やつまずきがあると、やる気を失ったり、自分はできないとあきらめて自己否定をしたりしてしまうことがある。また、困難に立ち向かうよりも楽な方に流れやすく、当初設定した目標を到達できずに終わってしまうこともしばしばみられる。このようなときに、本人の努力とともに、周囲の励ましも意欲を高める上で大切である。

本教材は、運動が嫌いなほく（雄志）が、本人の努力の努力はもとより、家族・教師・友だちの励ましによって苦手な運動を克服していき、自信を付けていくという内容である。ほくは、運動が苦手であるが、それをごま

かして、自分の姿を見つめることを避けていたが、お母さんの言葉がきっかけで奮起し、テレビ体操を毎日続けて、逆さの空を見るという第1の目標を達成する。そこで、足かけ後転ができるようにという第2の目標を立てて、毎日の練習に励むようになる。みんなの見て前で成功し、友だちからは、「雄志さんは、へんしんしたのです。」との称賛を受けることで、自分の変容を感じ取り、さらに自信を付けていく。そのような意味で、本研究のテーマとも合致した教材と言える。

本時のねらい：教材「ほくのへんしん」の苦手なことを克服しようと努力するほくを支えたものを考えることを通して、やろうと決心したことは、粘り強く最後まで努力し、やり遂げようとする意欲を高める。

(導入)

「へんしんする」とは、どんなことですか。

(展開)

「ほくは、お母さんの言葉を聞いて、どんなことに気が付いたでしょう。」

「ほくが、テレビ体操が続けられたのはなぜでしょう。」

「逆さの空が見えたとき、ほくは、どんなことに気付いたでしょう。」

「ほくが、足掛け後転ができたのは、なぜでしょう。」

「ほくの、どんなところが『へんしん』したのだと思いますか。」

(終末)

「みなさんは、これまでに何か小さなことでも『へんしん』できたことはないでしょうか。」

- (2) 「公正、公平、社会正義」を描いた教材の扱い

教材名：「同じなかまだから」（出典 日本文教出版 3年）³⁾

運動会を間近に控え、学級対抗の「台風の目」で、運動が苦手な光夫が仲間はずれになりそうな状況の中、主人公のとも子は、どうすればよいか迷う。そのとき、転校した同級生から届いた手紙に「言葉が少し違うという理由で仲間はずれになり、とてもつらい」と書かれていたことを思い出す。そして、「光夫も同じ2組の仲間だから、外すべきではない」と友だちに断言して、光男を励ます。

公正、公平とは、誰に対しても分け隔てなく接することができる心を基盤として、個の状況や立場を考慮し

た適切な態度であり、社会正義にもつながる考えである。これは、差別や偏見のない望ましい集団づくりに欠かせない態度である。しかし、人間は、自分が不利な立場になりたくないために、仲間外れをしてしまうこともあり、これが、いじめや差別などにもつながることもある。特に、集団スポーツにおいては、チームワークが求められるが、チームに運動が苦手なメンバーがいるとき、そのメンバーとどう接して、集団としてどう高めていくかは大きな課題である。

本教材の原作は、「小学校 道徳の指導資料とその利用6」（昭和58（1983）発刊）に掲載され、その当時は、内容項目「公平・公正」の教材として作られたが、平成元（1989）年の学習指導要領により、この内容項目が小学校1～4年生でなくなったこともあって、その内容項目が復活した現在、「友情、信頼」の教材として採り上げている教科書と、「公平、公正、社会正義」の教材として採り上げている教科書が存在する。本教材は、勝つために運動の苦手な光夫を競技から外そうとするひろしやクラスの人々に対して、とも子はその考えは間違っているということに気づき、そのことをはっきりと伝える姿を描いた教材である。授業展開においては、迷いながらも、望ましい姿を選ぶことができた「とも子」について考えさせることで、誰に対しても分け隔てなく、公正、公平に接することの大切さを感じ取らせる。また、この教材で扱われている「台風の日」は、主として運動会の団体競技において行われる種目であることから、この種目だけでなく、ボール運動をはじめ、集団スポーツにおいては、仲間に対して公正、公平に接することが大切であることを一般化させていくことが求められる。

本時のねらい：教材「同じなかまだから」のとも子の気づきや行動を通して、友だちの身になって考え・行動しようとする心情を高める。

（導入）

「みなさんが、“友だちっていいな。”と感じるのはどんな時でしょう。」

（展開）

「だって、ほくたちのグループには、光夫君がいるんだものな。」という言葉聞いたとき、とも子は、どう思いましたか。」

「休んだ方がいいんじゃないか」という言葉を聞いたとき、とも子は、どう思いましたか。」

「とも子が、“同じ2組の仲間じゃないの。”と、きびしくはっきりと言えたのはなぜでしょう。」

「転校したよし子の手紙を読んで、とも子は、どんなことに気が付いたのでしょ。」

「とも子の言葉で、ひろしや光夫はどう変わっていったでしょう。」

「もしも、とも子の発言が無視されるような学級だったら、みなさんは、その学級をどう思いますか。」

「これは、『台風の日』という種目だけのことでしょか。」

（終末）

「『同じ仲間だから』を読んで、気付いたことや考えたことを書きましょ。」

このように、道徳科に体育やスポーツを扱った教材を採り上げることによって、体育授業とは違った角度から、子どもにもものを見る視点を与えることは重要である。教材のタイプによって、効果的な指導方法は異なるが、体育授業と関連付けて指導することが有効と考えられる。また、その際に人間のよさや弱さにふれる指導が求められる。

VI まとめと今後の展望

学習指導要領の改訂では、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善と教育課程を構造的に捉え、21世紀に生きる子どもたちに必要な資質・能力の育成につながると強調されている。すなわち、それは、今日のグローバルで変化の激しい社会では絶えず新しい知識が生まれることから、それらに対応していく力、「学び続ける姿勢、学ぶ力としての資質・能力」、すなわち個人の学びの欲求の育成が喫緊の課題と言える。

筆者たちは、学習者個人の運動欲求と仲間との関係について、主体的・対話的で深い学びの視点から、個人の運動欲求の高まりが不可欠であると捉えた。個人の運動欲求の高まりに仲間との関係が影響されることを検証してきた。仲間との関係づくりには、コミュニケーションスキルや、ソーシャルスキルの高まりが基本であり、それを筆者たちは道徳的価値に求めたのである。もちろん、それはそもそも道徳の性質上、考えることはすべての学年において、議論することは学年が進むにつれて重要な手法であるとともに目的でもある。このように視野を広げて考えるならば、「道徳的価値について考え、議論する」ことも仲間との有効な関係づくりに繋がり、体育における個人の運動欲求の高まりと深く関わっていくと考えた。もちろん、体育における考え、議論する内容は個人や集団の課題解決に関連するものでなければならぬのは言うまでもない。

筆者たちは、個人の運動欲求と仲間との関係に沿って、個人スポーツ、集団スポーツの教材（マット運動・

ガードシュートゲーム)の実践事例を本論で紹介しているが、ここまで思索を深めてきたことによって、共同での学びの実践であったとも考えることができよう。

岡野・佐藤¹²⁾らが体育における「学びの共同体」の実践と探求で唱える対話的な学びの三つの次元は、三位一体でなければならないと述べているが、そのことは本研究の筆者たちにとっても首肯できるものである。すでに述べたように、体育について「考え、議論する」こと、すなわち対話することの質が大切になってくる。その対話の相手を岡野らの言葉を引いて概説するなら、対象との対話的实践を文化、自己との対話的实践を自己、他者との対話的实践では他者となる。この三つの対話的な学びの次元を道徳の内容項目と照らし合わせると「主として自分自身に関すること」「主として人との関わりに関すること」「主として集団や社会との関わりに関すること」「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」(順番は次期学習指導要領に拠る)と重なっているように思われる。

本研究の筆者たちは、個人の運動欲求と仲間との関係は、体育と「考え、議論する」道徳との相乗効果として考えてきた。そのような相乗効果はすでに岡野らの体育における「対話的实践」の模索として検証されている。

ここで、私たちが提案する個人の運動欲求と仲間との関係は、岡野らの体育における学びの三つの次元の内の「自己との対話的实践(自己内実践)」では、子どもに自己課題を明確化させると同時に、自己評価能力を高めることが重要である。すなわち、1人1人の児童が「自分のもっている力」を理解し、その力に応じた「現在の力より一步上の適切な課題」を持ち、創意・工夫、努力のもと、自発的、自主的に「解決」していく力を身に付けることであり、そのために「安全面」「技能の系統性」「運動のこつやポイント」「学び方」など、発達段階に応じた単元計画を作成することが大切である。

そして、運動のイメージをもつこと、よい動き目指すこと、適切な課題をもつこと、実際に試して体を動かすこと、互いに意見を出し合うこと、互いに動きを見合うこと、声を出して応援したり励まし合ったりすること、記録を綴っていくこと、互いの動きを認め合ったり、勝敗を受け容れたりすることなど1時間の中で、児童同士が一つ一つの探究的な学びを積み重ねていき、それを次の時間につなげていく。こうした「他者との対話的实践(対人的実践)」の積み上げが、主体的・対話的で深い学びにつながっていくものと考えられる。

児童が目標を目指して、適切な課題を設定して、探究的な学習の流れの学習過程を通して仲間とのかかわりや学び合いを高めていく。しかし、児童は仲間との関係に

おいて、運動欲求も高揚したり、阻害されたりもする。体育の楽しさや喜びを味わう場面の多くは課題の達成に仲間の励まし、応援、協力が大きく関与していく。

体育の授業で仲間と共に進んで運動し、共に課題を探究することを通して、個人の運動欲求はスパイラル的に高揚し、できる喜びや学ぶ楽しさを味わうエネルギーとなる。

本研究では、個人の運動欲求と仲間との関係を重視することによって、児童が多様な他者とともに協力し対話しながら課題を解決したり、新しいアイデアを出し合ったりすることを経験し、学びの手ごたえを感じ、より深い学びを探究することが考えられる²⁾。

文献

- (1) 藤田善正(2022). 個性の伸長を扱った道徳教材の在り方 大阪教育大学道徳教育学, 道徳教育学論, 20, 136-138.
- (2) 俵谷好一 藤田善正 西岡毅 弘田陽介(2018). 小学校における体育と道徳の統合的な学習の事例提案-次期学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの考え方に沿って- 大阪総合保育大学研究紀要, 12, 10-11.
- (3) 生きる力3 編集委員会(2019). 和田美美子原作 同じ仲間だから 日本文教出版 86-91.
- (4) 川越市立仙波小学校(2011). 平成22・23年度 道徳教育 研究のあゆみ 川越市立仙波小学校
- (5) 小寺正一(1995). 道徳読み物資料の特質-小学校副読本資料における人物の扱い方- 道徳教育方法研究創刊号 日本道徳教育方法学会, 25-34.
- (6) 小山満(2013). 創価教育学会 心の教育 巻頭言 創大教育研, 22, 1.
- (7) 三木四朗(2015). 器械運動の動感指導と運動学 明和出版 104-110.
- (8) 文部科学省(2017). 小学校学習指導要領 第2章 各教科 第9節 体育 文部科学省
- (9) 文部科学省(2017). 学校教育法施行規則の一部を改正する省令 小学校学習指導要領・中学校学習指導要領
- (10) 文部科学省(2010). 学校体育実技指導資料第8集 ゲーム及びボール運動 東洋館出版 43-44.
- (11) 中村敏雄(1989). 体育とは何か 中村敏雄・高橋健夫編 体育原理講義 大修館書店 2-11.
- (12) 岡野昇 山本裕二(2015). 第一部第2章 体育における対話的学びのデザイン 岡野昇、佐藤学編『体育における「学びの共同体」の実践と探求』大修館書店 45-46.
- (13) 大谷一記 落合優(2006). 学校体育に関する児童生徒の意識調査~小学生の意識~ 神奈川県立体育センター指導研究部 スポーツ科学研究室, 1-106.
- (14) 大阪市立中央小学校編(1993). 平成4・5年度 大阪市教育委員会指定研究学校(体育科)第2年次報告書 大阪市立中央小学校, 1-14.
- (15) 新訂 新しい道徳4 編集委員会(2019). 児童作文原作 ぼくのへんしん 東京書籍 14-17.
- (16) Spencer H. (1860). Education; Intellectual, Moral, and

体育における児童の運動欲求と仲間との関係についての一考察

Physical New York, D. Appleton and company.

- (17) 杉山克也 (2009). 体育授業における道徳的効果に関する実践的研究 上越教育大学修士論文
- (18) 高村文武 (1999). 器械運動(領域)における指導の課題

－児童生徒の学習意欲及び学習環境の実態調査－ 平成10年度山梨県総合教育センター 保健体育研究室研究紀要, 67-81.